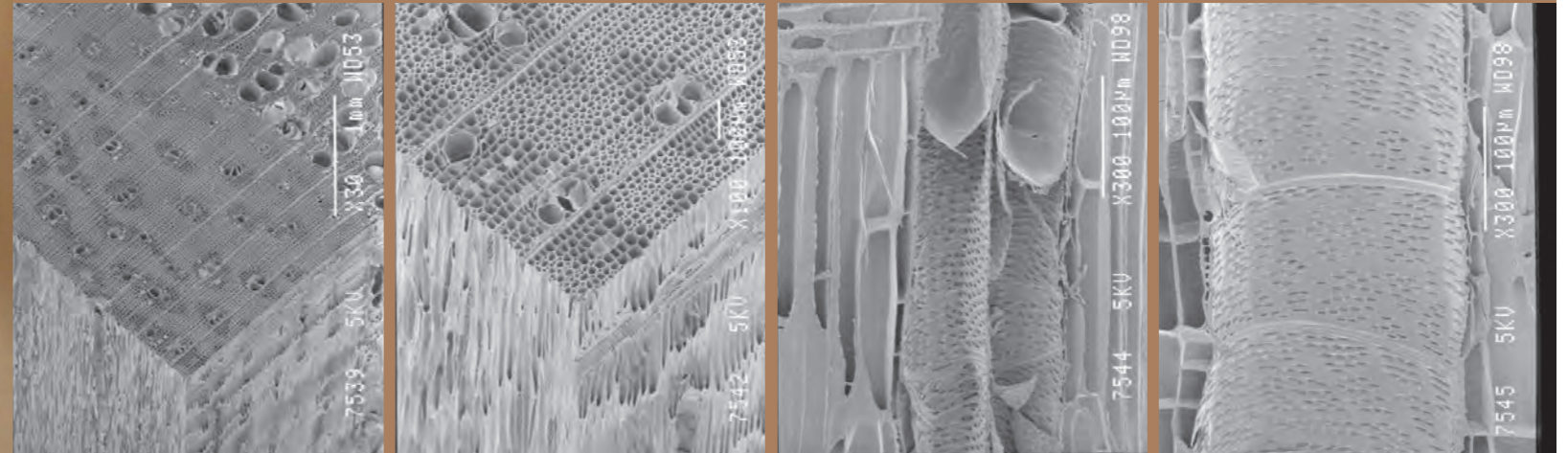
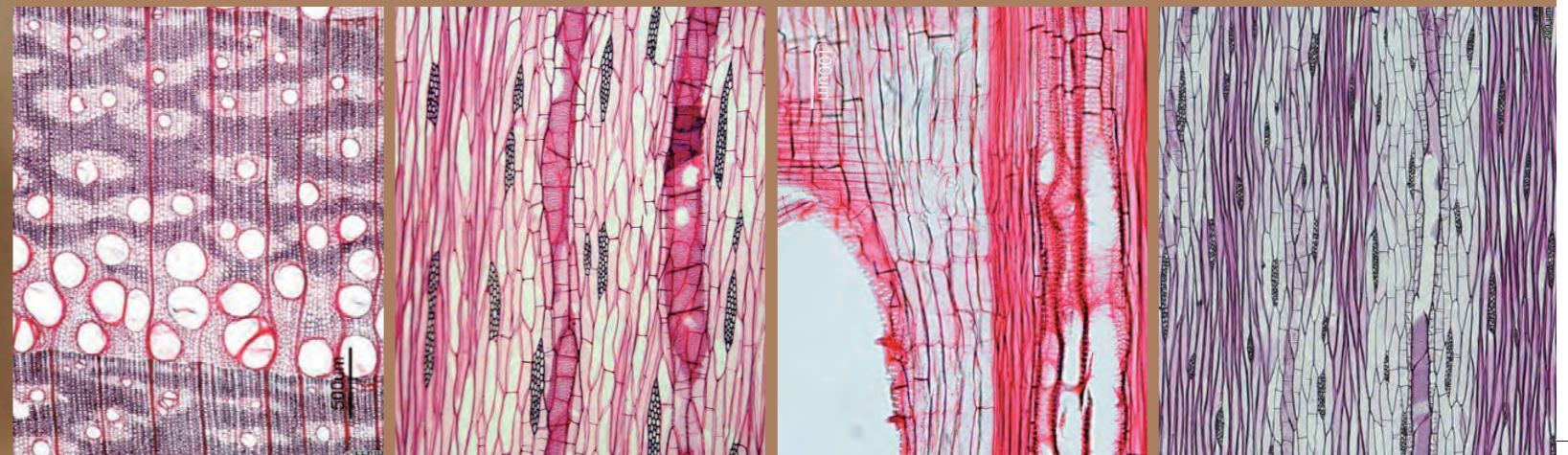


PLY

木と人の素敵な出会いを探る



PLY 木の誌上展覧会 走査電子顕微鏡・光学顕微鏡写真「キリ」



写真提供：国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所

PLY (ぶらい)

PLYとは重ねるという意味があり、WOODを加えるとPLYWOOD(合板)を意味している。歳月や経験を重ねることの重要性和、木材が年輪を重ねて成長する姿も重ね合わせている。

巻頭インタビュー ■ つなぐ

日本野鳥の会東京 幹事 明治神宮探鳥会担当

第15回 野鳥観察の歴史、森、鳥たちを語る 明治神宮探鳥会の案内人

糸嶺 篤人

木 アラカルト 5 夢の不燃木材へ、不屈の挑戦を続ける 株式会社アサノ不燃のセルフネン技術

表紙写真：「エナガ」探鳥会リーダー 福島功氏撮影



第15回

PLY

巻頭インタビュー

「つなぐ」

2020年、創建100年を迎えた明治神宮。

人の手で造られた、

稀有の存在として名を馳せる神宮の森。

都心にありながら、

多様な生態系を誇る森に、鳥も集い、人も集う。

森と街の移り変わりを映す、

鳥や自然を見続ける営為。

その新しい魅力を語り続ける、

明治神宮探鳥会の案内人糸嶺さんにお話を伺いました。

野鳥観察の歴史、森、鳥たちを語る明治神宮探鳥会の案内人
日本野鳥の会東京 幹事
明治神宮探鳥会担当 糸嶺 篤人

人の手で造られた「永遠の森」

明治神宮探鳥会を語ることは、明治神宮の歴史を語ることもありません。

明治神宮は、明治天皇と昭憲皇太后を祀る社です。明治天皇崩御の後、南豊島御料地を候補地に建立が計画されました。広野原同然だった同地に、全国からの献木10万余を用い、樹木の配置は当時の林学者たちが英知を集めて考案しました。境内中心部はマツなどを主としながらも、生育の難しい暖地性の照葉樹林も配置し、長い時間をかけ150年後には鬱蒼とした極相林となることを目指した遠大な計画でした。人の手になる「永遠の森」。世界でも他に例のない稀有の森は、創建から100年を迎え、今にその姿を伝えています。

野の鳥をありのままに、姿や声を愛でる

近代に始まる野鳥観察の黎明時代

明治神宮の創建は1920(T9)年。それに先立つ1912(T元)年、日本鳥学界が発足。鳥に関するアカデミズムのスタートです。1934(S9)年、中西悟堂の呼びかけに北原白秋、柳田國男、金田一春彦らが加わって発起人となり「日本野鳥の会」が創立され、「野鳥」誌も創刊されました。僧籍にあった中西悟堂は当時の文化人とも言える位置にあり、「野の鳥をありのままに、生きざまを見て、姿や声を愛でる」という野外



「人のつくった森」上原敬二より
「永遠の杜」予想図「明治神宮境内林苑計画」(明治神宮造営局 技師：本郷高徳 大正10年/1921)

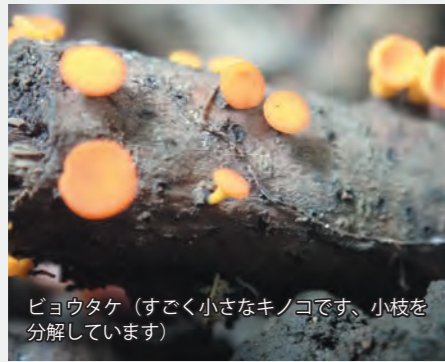
観察を提唱しました。併せて「日本野鳥の会 探鳥会」も発足しました。探鳥という語は悟堂の造語です。富士山麓で第一回探鳥会を開催しています。

これ以前、江戸時代頃まで日本人にとって、鳥は「そこにあるもの」であって積極的に関わるものではありませんでした。例えば、スズメは群れていっぱい飛んでいるものであり、ときに食べるものであり、ときに害をなすものであり、海に鳥柱があれば漁場の目安だったり：それ以上のもではありませんでした。柳田國男は日本人と鳥との関係を、民俗学の視点から綴りました。代表作「遠野物語」(1919(M43)年)の序文に「野鳥」の語を記し、1928(S3)年に「野鳥雑誌」の一文を発表していた柳田は、中西悟堂を物心両面で支えました。花鳥風月の伝統や文学の対象にとどまっていた文人墨客の世界から、野鳥観察がひろく市民の間に広がりをもっていく歴史的な契機となりました。

1944(S19)年、戦争の影響で「野



神宮の森に集う、野鳥たちに魅せられて 野の鳥をありのままに観る営為



ピョウタケ (すごく小さなキノコです。小枝を分解しています)



クビキリギス (成虫越冬をするので、春暖かい夜にジューと鳴いているのはこれです)



トガリアミガサタケ



エサキモンキツノカメムシ 交尾 (ハートをしょっている虫です)



ツノホコリ (変形菌)



モグラ塚 (アスマモグラの巣穴がこの下を通っています)



カワラタケ (木材を強力に分解するキノコです)



マガモ (冬によく来ています。求愛行動が見られることも多いです)



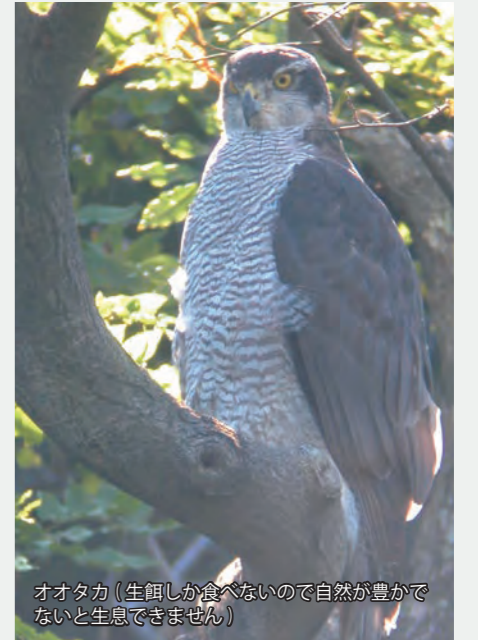
ウツボホコリ (変形菌類、粘菌ともいいます。湿度の高い夏はこの仲間もよく見かけます)



ギンリョウソウ (自分では光合成をしないで、森の菌類から栄養を搾取しています)



アオジ (山に雪が降ると平地に降りてきます)



オオタカ (生餌しか食べないので自然が豊かでないと思いきえませんが)

写真提供：福島功氏

写真提供：高橋嘉明氏

鳥」誌は休刊しますが、戦中の中断を経て1947(S22)年に「日本野鳥の会」は本部―支部体制に移行して復活し、「日本野鳥の会東京支部」が設立され、中西悟堂自ら支部長に就任、定例の「明治神宮探鳥会」は高司信輔のサポートもあってスタートしました。当時、明治神宮の宮司であった高司信輔は、名門華族の一員で、若くから鳥類学を志し別名「鳥の公爵」とも呼ばれた人でした。

明治神宮探鳥会の盛衰

―野鳥観察の大衆化―

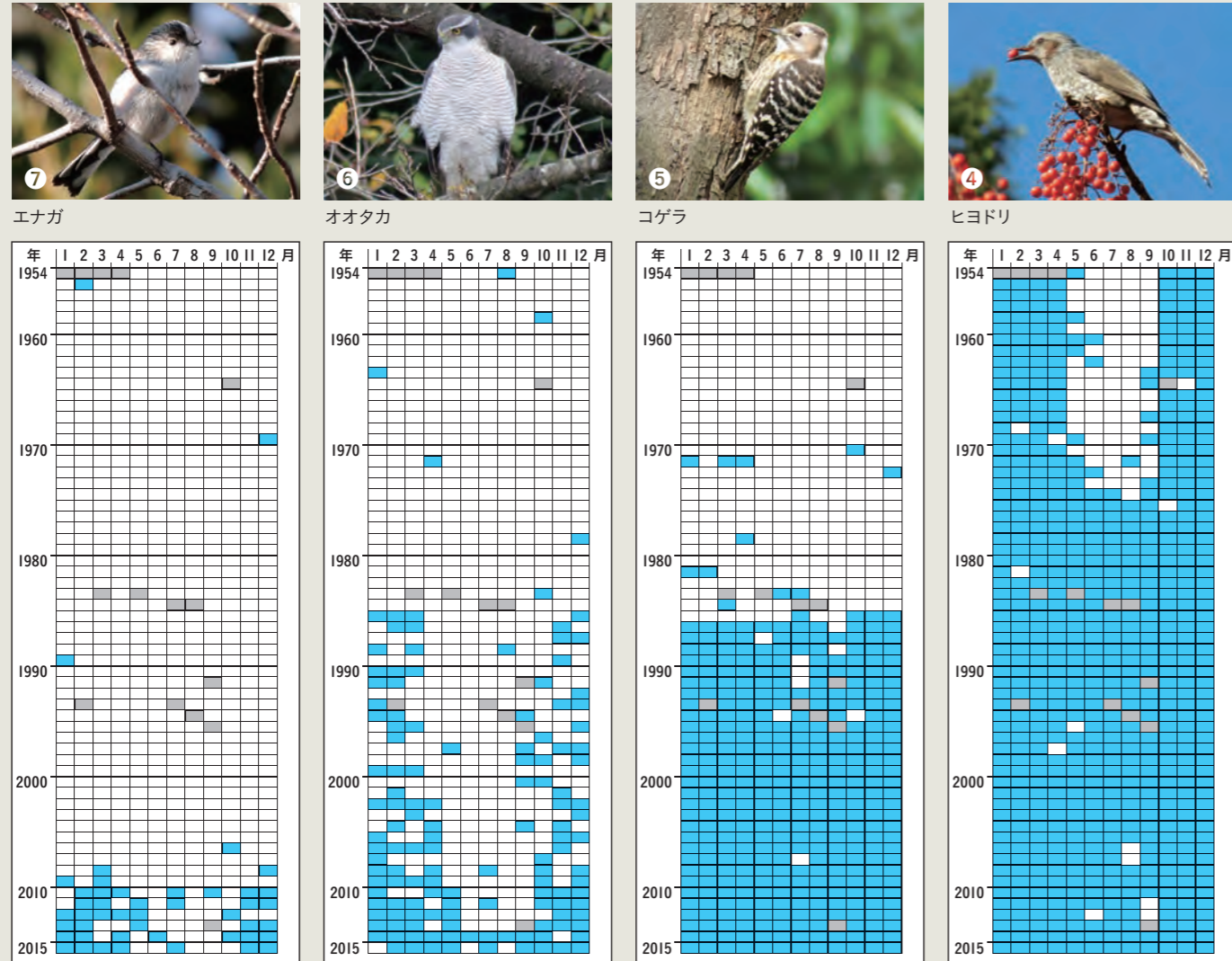
二人を失った後の1960年代は、探鳥会の運営体制ということでは不遇な時代でした。しかしこの一時期を交代で支えていた担当者には、高野伸二、浦本昌紀、蓮尾嘉彰など、その後この世界で名を馳せる方々がいました。固定した運営者は不在でも、熱心な参加者は多かったのです。探鳥会の年間延べ参加人数が会員数の2倍を超えたり、参加者が100人を超える時もありました。専門性の高い人の話が聞ける貴重な場であったことも事実です。

60年代中頃からは他の場所でも定例探鳥会が始まり、野鳥観察の大衆化も本格的に進みました。リーダーもいわゆる専門家の「先生」だけが教える体制では間に合わなくなり、次第に「市民が市民に伝える」かたちで、探鳥会の担い手が生まれ、野鳥観察が専門家の手を離れてゆく時代となりました。1965(S40)年頃から明治神宮探鳥会は

「先生」に加え、探鳥会の運営は事務方の手も必要とします。この役割を引き受けたのが小泉吉之助です。小泉は貴族でも専門家でもない「鳥好きの床屋のおやじ」でした。榎山徳太郎に小泉吉之助、戦後の明治神宮探鳥会の初期は、もっぱら二人によって支えられる時代が続きました。小泉は1957(S32)年に急逝、榎山は1962(S37)年に病気で他界しています。

グラフ2

森林性の鳥の生息状況の変化



■:生息あり □:生息なし ■:データなし

「野鳥」誌 2017年1月号No.811 川内博氏（日本野鳥の会 研究部長）の論考「明治神宮の野鳥たち～70年間の変遷」から

オシドリはカモ類の中で、少し変わった種です。溪流や湖沼などに生息する水鳥ですが、森がないと生きていけません。餌も魚ではなく基本的に木の实など植物食傾向が強い。開けた水面に出ることは少なく、池があつて、その水面に木の葉が被い被さるよう繁茂した木陰を好みます。一般的に公園は、人間のために造られているため、全体的に明るい環境に造られています。必然的にオシドリの好む環境は少なくなっています。唯一、神宮の森にはそうした環境が

あります。同じように、他の鳥類の盛衰の様子から森の変化が読み取れます。森林性の鳥の変化を見てみましょう。

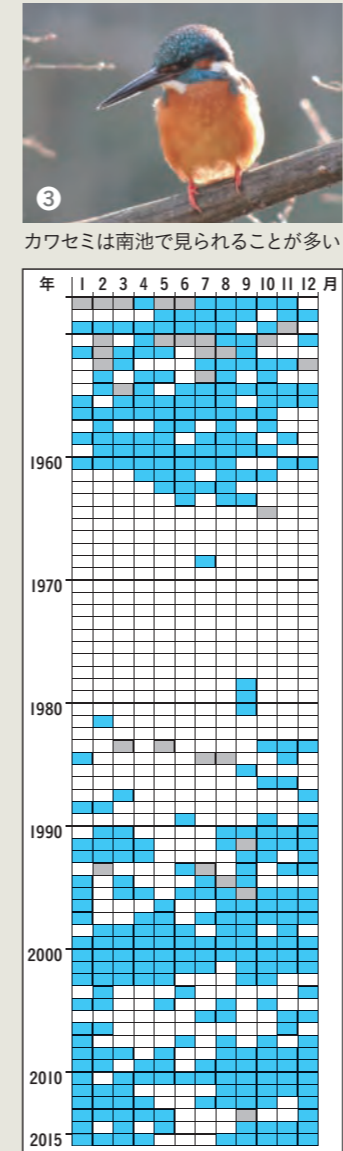
コゲラは、枯れ木や枯れ枝だけに巣を作るキツツキの一種です。戦前も含め市街地では生息していなかった鳥ですが、探鳥会のデータから、1980年代半ばに留鳥として定着したことがわかります。今では神宮の森の鳥相の主要構成種となっています。これからも森が極相林に近い状態を迎えていることがわかります。

埋め立てられ、小河川はコンクリート三面張りとなり、雑排水が流れ、大河川にも工場の廃液や農薬などの汚染物質が混入しました。小魚や水生昆虫を餌にし、土の崖に巣を作るカワセミはこの時期、神宮からも市街地からも姿を消しました。しかし、その後探鳥会の記録では、1980(S55)年頃から再び見ることができるようになりました。

例えば水鳥のカワセミです。高度成長期の20～30年間、神宮ではほとんど見ることがなかった鳥です。高度成長期といえ、1964(S39)年は東京オリンピックの開催年です。オリンピック特需で東京一帯は高層ビルや高速道路が建設され、それに伴って自然環境は少なくなり、湿地や小さな池は

グラフ1

探鳥会当初からのカワセミの記録



カワセミは南池で見られることが多い



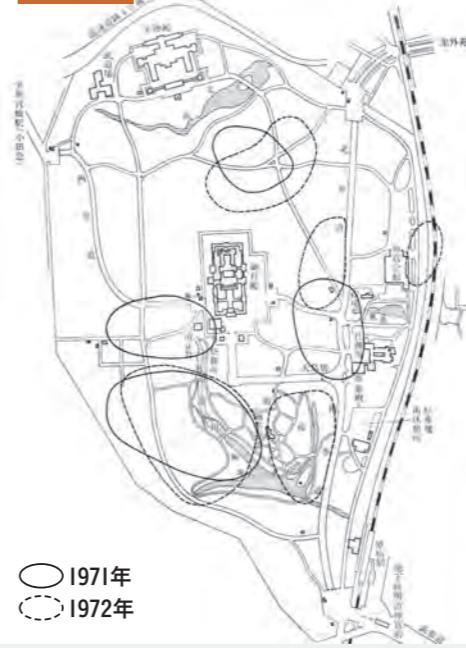
ヤマガラは明治神宮を代表する鳥



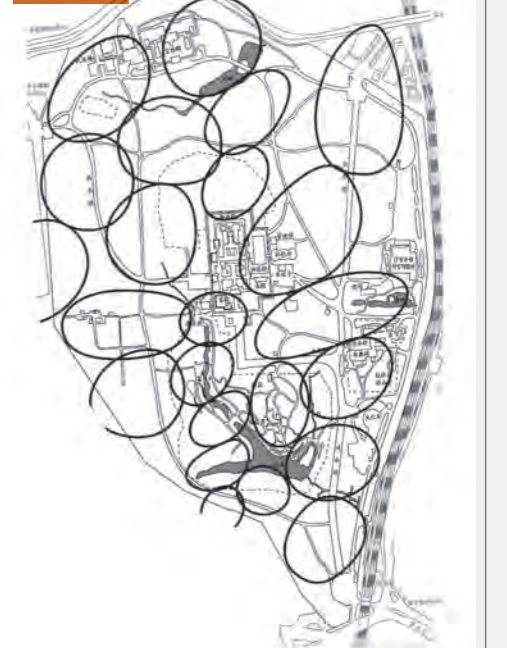
さえずるシジュウカラのオス

図 ヤマガラのテリトリーの变化

1970年代



2010年代



○ 1971年
○ 1972年

森の変遷といふには、鳥たちの生態―森の移り変わりと共に―

林学者たちが想定したように、明治神宮の人工の森は、遷移の変遷を重ねてきました。遷移の変化は、神宮の森に生息する動物たち、鳥たちにも影響します。植生の変化に応じて、それぞれの環境を好む鳥の種類も変化してきました。神宮の木々がまだ若く、高木でもなかった頃は、草地性の鳥類が繁殖し、森林度が高くなるにつれ、鳥の種類も変化してきました。

原っぱにしかない鳥が多ければ、神宮の森は原っぱに近い状態だったことがわかり、深い森に生きる鳥が多くなれば、そこは森です。明治神宮探鳥会には、戦後から70年間の観察記録が残されています。そこから鳥類の変化を、また森林の遷移の様子も読み取ることが可能です。それらデータを解析すれば森の茂り具合もわかります。

例えば水鳥のカワセミです。高度成長期の20～30年間、神宮ではほとんど見ることがなかった鳥です。高度成長期といえ、1964(S39)年は東京オリンピックの開催年です。オリンピック特需で東京一帯は高層ビルや高速道路が建設され、それに伴って自然環境は少なくなり、湿地や小さな池は



探鳥会 写真提供：高橋嘉明氏



残っているので毎年50羽ぐらいが確認されています。

神宮の森林度が高くなったおかげで、猛禽類のオオタカが1980年代半ばの冬季に現れ、90年代には冬鳥として定着し、さらに子育てを始めるようになり、今では毎年繁殖しています。オオタカは生きた餌(鳥)を必要とし、オシドリはオオタカのいい餌になってしまおうという、オシドリにとっては辛い現象も発生してしまいました。

こうした変化を語るには、野鳥観察を日々、月々、そして年々重ねてきた結果を時間軸にそって眺めているからです。鳥たちの生態を知り、その生息を知ることが、森の変化、そして街の変化の移り変わりを知ることでもあります。「続けること」から見えてくるものとも言えましょう。70年間重ねられてきた、野鳥の会の観察記録から得られた貴重な成果です。探鳥会という定点観測から得られた貴重な財産です。

明治神宮探鳥会へようこそ

未知の視点への誘い

「バードウォッチング」という語や「自然保護」という概念が一般に普及し始めたのが1980年代です。野鳥観察も限られた「趣味人」の世界から、レジャーの一環として広がりを持つようになり、この頃、日本野鳥の会の会員数も劇的に増えました。子どもたちと連れ立って親子参加する人たちも。その後、2000年代頃から会員数は減

に耳を傾けるのも、ふだんの耳の使い方とは異なります。私たちの身体が、忘れかけていた身体の使い方、五感の蘇らせ方を体験する機会です。近年は植物や昆虫その他さまざまな生きものの観察記録も残すようになりました。モグラやヘビなど都会では少なくなつた動物も大都市東京の中に息づいている空間が、明治神宮の森です。鳥たちだけでなく、生きものたちと私たちは同じ大気を呼吸し、同じ世界を生きています。視点を変えるだけで、自然は身近にあることを知る機会の一つが探鳥会ではないかと思えます。

私は生きものが好きで、高校時代は生物部に属していました。先輩に野鳥の会の会員がいることを知った縁で、日本野鳥の会で、明治神宮探鳥会の担当として、いつの間にか40年が経ちました。今は一人でも多くの方に、その魅力を知っていただきたいと思っています。私はその案内人を務めたい。



PROFILE 糸嶺 篤人 (いとみね あつひと)

- 1959年千代田区生れ、杉並育ち、現在は板橋区在住。
- 高校でバードウォッチングをはじめる。
- 東京農工大学農学部林産学科修了、野鳥研究会所属。
- 身近な自然を紹介する公園めぐり探鳥会、定例明治神宮探鳥会の担当を約40年続けている。
- 食品会社に勤務
- 日本自然保護協会自然観察指導員



<https://wbsjt.jimdo.com/>

り始めます。一方で観察者の高齢化、撮影機材の普及、インターネットの普及などとともに、新しい趣味の形が広がってきました。「若者離れ」が進む一方で、同時に「学術離れ」も起こり、「癒し」「生き甲斐」を野鳥観察に求める人も増えてきています。

「アウトドア」というカテゴリーが、レジャーとしての一面だけから語られ、自然を知ることより、自然界に人間生活を持ち込むことのように勘違いされる傾向もあるのではないかと感じます。

日本野鳥の会の会員数は、ピーク時は約6万人でしたが、今は約3万人です。英国王立野鳥保護協会(RSPB)は約100万人。アメリカのオーデュボン協会は約56万人です。共有されている自然観の違いが現れているようです。

そして今は、野鳥観察から何が得られるのか、何が求められているのでしょうか。森に行き、森の空気を吸いながら、鳥のさえずりに耳をすまし、木の上の鳥に目を凝らし、生きているものの気配を感じる。それは、日常の暮らしを繰り返すことからは得られない視界へと私たちを導く行為です。日常の暮らしからだけでは気づかない「視点を持つ」「視点を変える」ことの面白さ、奥深さではないかと思えます。

探鳥会の魅力は何か。地面にしゃがんで、足元の草地に生きる昆虫を凝視するのも、ふだんの姿勢ではありません。鳥のさえずり、皆さん、今はコロナ禍で探鳥会も縮小していますが、終息したら明治神宮探鳥会に参加してみませんか。お待ちしております。

取材を終えて

糸嶺篤人氏は、日本野鳥の会東京が、毎月定例で開催する明治神宮での探鳥会を40年にわたり実施されておられます。

日本野鳥の会東京は、探鳥会を行うのと同時に、明治神宮の森を取り巻く環境変化、森自体の生育による野鳥に与える生態変化を調査しています。終戦直後からの70年間のデータを以って、明治神宮の森が如何に生育し、その結果、見られる野鳥が如何に変化したかを知る第一人者です。

本年1月には探鳥会を開催していただき、明治神宮の森を回る事が出来ました。自然観察会で観察できた野鳥は20種ほどで、その他、地衣類やキノコなども見る事が出来、楽しい時間を過ごす事が出来ました。今後は探鳥会を通して、東京に住む野鳥、そして野鳥を育む環境を皆様に感じていただきたいと思います。



第5回

夢の不燃木材へ、 不屈の挑戦を続ける 株式会社アサノ不燃のセルフネン技術

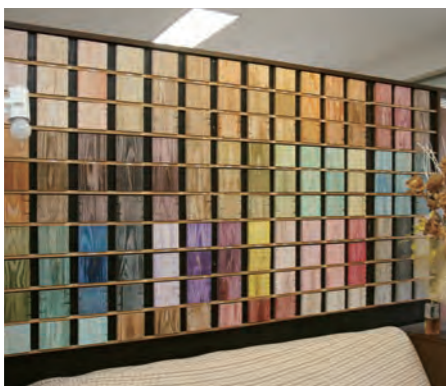
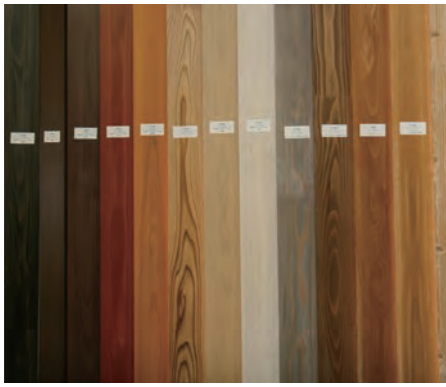
木は燃える。この事実を疑う人はいない。では、燃えない木材は可能なのか。その問いに多くの専門家が首を振った。中大規模建造物の多くが、コンクリートと鉄を材料とする最大の理由だ。難燃処理木材の開発には多くの企業が取り組んでいるが、不燃木材の開発は極小に留まっている。

その常識に挑戦した企業・人がある。株式会社アサノ不燃の浅野成昭氏だ。同社が開発したセルフネン不燃木材は2001年、日本で初めて国土交通省から不燃木材の認定を受けた。2006年、同製品は経済産業省が提唱する「新日本様式100選」にも選定された。

セルフネン不燃木材を開発した同社代表取締役、浅野成昭氏にお話を伺った。浅野氏は言う。「燃えない木材」の実現は、「木の文化」、「木に関わる産業」の刷新と転換であり、それが私の夢だと。



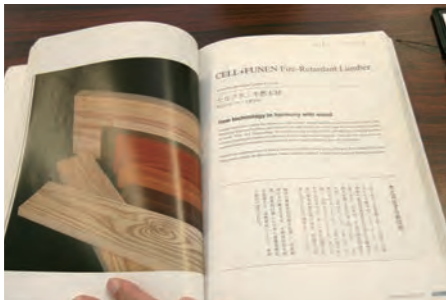
一級建築士、インテリアデザイナーの資格も持つ、浅野成昭 代表取締役



ショールームにて。表面加工・塗装のバリエーションサンプル。標準色以外の色およびワックス、ウレタンも。

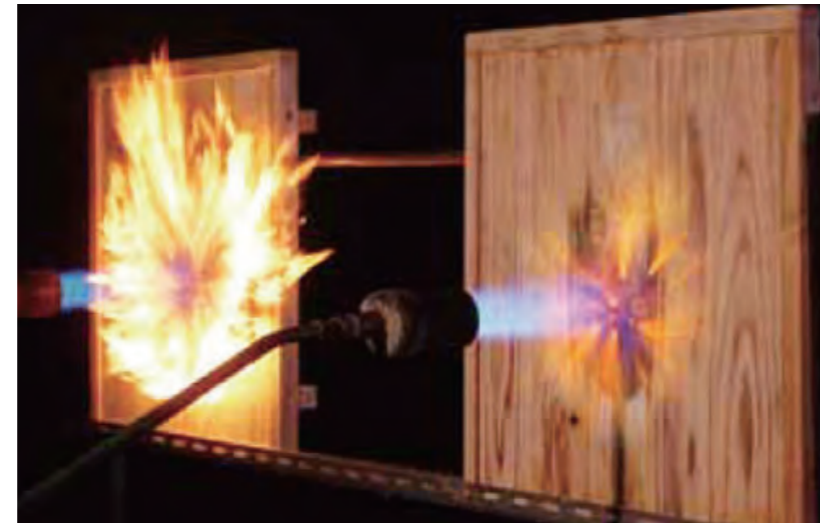


火炎放射試験を見せていただいた。表面は黒く変化するだけで、触ると消し炭は指に付着しなかった。



「新日本様式100選」を紹介する冊子。セルフネンの紹介頁

株式会社アサノ不燃 本社/ショールーム
〒135-0016 東京都江東区東陽5-28-6 TSビル5F
TEL : 03-6666-0315 FAX : 03-6666-0310
代表取締役：浅野成昭
不燃化技術研究組合（農水大臣・経産大臣認可）理事長



燃焼比較実験 [右：セルフネン不燃木材 SUS ▲NOH (ササノ) 左：不燃処理なし]



優良住宅認可され始めています。
新しい「木の文化」、
「木に関わる産業」をめざす夢
含浸させる適当濃度は、樹種によって、さらに同じ樹種でも産地によって異なります。産地に応じた不燃処理が必要になります。これを一社でやるうとしたら難しいが、産地材の特化した処理工程をつくれたら、地産、県産材の付加価値の向上につながります。地産製品でありながら売り先は世界です。これなら山元の林業にも利益をもたらします。地産地消の持続可能な産業サイクルを実現できます。私は何としてもこれをやりたい。私の夢です。

地元福井で、父の木材屋を継ぎ、建築に携わりました。また、消防団を18年務めました。このとき、母の実家が火災に合い、燃えました。築約100年の貴重な建物でした。涙が出ました。45歳のとき、不燃木材を開発しようと思いました。以来、無理と言われながら私財を投げ打ってきました。私財が底をついても支えてくれる方の御支援でここまでできました。「セルフネン」弊社の事業ブランド名です。ネーミングはセルロースのセル、不燃と掛け合わせた造語です。特許取得に伴う提携企画はいろいろありましたが、私は私財を増やすことに興味はない。この技術が新しい「木の文化」、「木に関わる産業」をもたらしていく未来に向けて発信し続けていきたい。

不燃木材、その技術の核心は？
不燃木材とは？
木材は熱されて一定の温度（約260℃）に達すると熱分解が始まり、タール・ガスなどを放出し始めます。ガスには一酸化炭素や水素など可燃性のガスが含まれ、ガスと空気とで木材のまわりに可燃性混合気層がつくられ、これがさらに熱されて、この混合比が可燃限界に達すると引火によって燃焼し（引火温度）、混合気層がさらに約500℃に達すると燃焼し始めます（発火温度）。いったん燃え始めると燃焼熱はさらに木材の分解を促し、燃焼が促進されます。燃焼サイクルと呼ばれます。
火災は煙とガスで着火する。煙とガスが無ければ着火しない。セルフネンは火があたると表面が炭化するだけで着火しません。現在、消火方法とされるやり方は、火が点いてから消火するという発想です。この方法は抑制ではなく事後処理です。消防庁に行つて製品説明をしたら、これをどうするんですか？ と聞かれました。これは燃えない木材ですと言ったら、私たちは消すのが仕事ですからと言われました（笑）。

不燃性能の技術的核心理念は？
弊社の不燃木材の特許原理は、主にリン酸とホウ酸です。リン酸は液体なので木材に含浸して、乾燥させて塗装しても周囲の水分を吸って液だれを起こし、性能が劣化します。ホウ酸は常温常圧では無色の結晶または白色粉末の固形成分です。これを木材に含浸させるには水溶液にすることが必要になります。ホウ酸は溶解しにくい。通常では約20%程度です。私どもはこれを通常では無理とされる、高濃度の水溶液にすることが出来ました。特許の核心理念がここにあります。これを樹種、材の産地に応じた水溶液を作り、製造ノウハウにより適量とされる量を単板積層材（LVL）に含浸させて不燃化させます。乾燥することで薬剤は木材内部に固形化し性能を維持します。また、表面の白革現象を防ぐため、表面処理し専用塗装を行います。ホウ酸の毒性は人間にとっては急性毒性で食塩と同程度です。腎臓機能で排泄できない昆虫類には毒性が強く現れ、殺虫剤として利用されますが、欧米ではシロアリや菌類への防虫防腐剤として木材に塗布されて使われています。近年日本では毒性の低さと長期有効性から

日刊木材新聞社新社屋



三角樹格子説明



階段 福島カラマツCLT
キーテックLVL



タモ製の欄間と木の葉モチーフの天井



正面玄関ドア



新聞棚



外観

本年9月末に竣工した日刊木材新聞社の新社屋を見学してきました。さすが業界紙発行企業が思い入れを込めて設計した建物であり、構造用集成材、CLT、構造用LVL、構造用合板等様々な木質素材が使用されていますが、これ見よがしの感はなく、それぞれの材料が適材適所に使われていて、好感の持てる建物となっています。木造3階建てで、構造躯体はカラマツ集成材をGIR接合してあるので接合金物は見えません。全体に、細かいところまで配慮が行き届いた建物です。



吹き抜け天井と三角樹格子



1F



3階会議テーブル
神代ニレ (埋れ木・十勝川)



玄関横

- ◎3階床は屋根部の集成材大梁から吊り下げられています。この床は無節のヒノキCLTとすることで、2階から見た天井も美しい。また、大梁は頬杖でカバーされて船底や木の葉をイメージさせます。
- ◎両開きの正面玄関のドアはシナ共芯合板をNルーラーで加工した木の葉模様です。
- ◎2、3階西面全面耐火ガラスの内側吹き抜け部に配置された三角樹格子は、この建物の外観を特徴つけていますが、一つ一つの形状が細かく計算されて、西日の遮光に重要な役割を果たし、同時に開放感を与えてくれます。
- ◎3階会議室のテーブルは神代ニレ(埋れ木)製で、曲線を持った側面は相互に組合せを変えられることができます。
- ◎空調設備の前に設置されたタモ製の欄間は空気吹出し量に応じて穴の大きさを変化させてあり、空間に溶け込んでいます。
- ◎ゆるく湾曲した仕切り用衝立もルーバー一本の形状が工夫されているようです。
- ◎1階にはタモ製の新聞棚が配置されています。

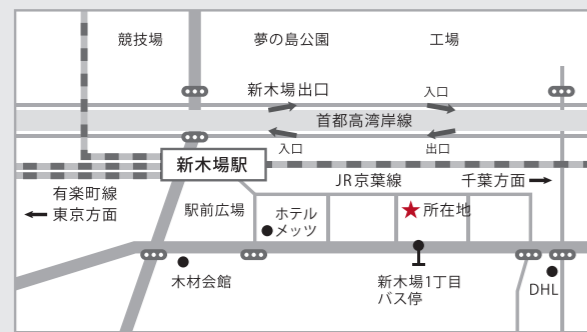


天井 CLTヒノキ無節



仕切り用衝立

公益財団法人PHOENIX 木材・合板博物館のご案内



開館時間 10:00~17:00 (最終入館時間16:30)

入館料 無料

休館日 月曜日、火曜日、祝日、年末年始

※幼児および小学生の入館には、保護者のつきそいが必要です。
※都合により開館日・時間を変更する場合がございます。

所在地 東京都江東区新木場1-7-22 新木場タワー3F・4F
TEL 03-3521-6600 / FAX 03-3521-6602

アクセス 1 ●東京メトロ有楽町線●JR京葉線●東京りんかい高速鉄道
「新木場駅」下車 徒歩7分

アクセス 2 ●東京メトロ東西線
「東陽町駅」下車
→ 都営バス [2のりば] 木11甲
「新木場一丁目」バス停下車 徒歩1分



このビルの3F-4Fです!



facebook



HP

<https://www.woodmuseum.jp/>

PLY

第15号 2020 WINTER

【発行日】 2020年12月10日 ■定価: 1,100円(消費税込)
【発行】 公益財団法人 PHOENIX 木材・合板博物館
〒136-8405
東京都江東区新木場1-7-22 新木場タワー3F・4F
TEL 03-3521-6600 / FAX 03-3521-6602
E-mail info@woodmuseum.jp
【発行者】 吉田 隆
【編集】 太田正光(編集長)
PLY 編集委員会
【デザイン】 株式会社デジタルアート

編・集・後・記

ベートーヴェン生誕250周年に当たる本年は、クラシック音楽界では様々なイベントが計画されていたが、その多くが中止や延期に追い込まれてしまった。本号で紹介した明治神宮も鎮座百年の節目の年であったが、11月の大祭は当初計画よりも控えめに挙行されたようだ。当博物館も未だにイベント開催はおろか、一般の来館者を受け入れるタイミングさえ見通せないでいる。幸いこの度、館内の3D-VR映像を撮影していただけたので、バーチャルな世界で博物館探索を楽しんでいただきたい。ままならない活動を少しでもカバーしたいと思い、本誌も「木を楽しもう」「木アラカルト」に加えて、今回「木の建築探訪」のコーナーを立ち上げてみた。シリーズものとしてご支援いただけることを期待したい。(o)

裏表紙

PLY 木の誌上展覧会 第15回 走査電子顕微鏡・光学顕微鏡写真「キリ」

ゴマノハグサ科 (APG 分類ではキリ科) キリ属の広葉樹で、成長が速く植栽後10年ほどで樹高は10m、胸高直径は50cm 近くになる。早生で花も美しいので海外でも園芸樹として植栽されている。海外の図鑑などでは原産地が中国とされているものも散見されるが、日本には元々自生しているとの説もあり明確なことはわかっていない。

日本におけるキリは南部桐や会津桐が有名で、特に桐筆筒は日本の数ある木製家具の中でも白眉といってよい。薄い板で加工された筆筒は、狂わず、湿気を通さず長持ちすることが知られている。木材は、辺心材ともにやや灰色がかかった淡い黄褐色で、密度(比重)は0.2~0.35g/cm³ほどで日本では最も軽い木であり、木材の組織は軸方向の柔細胞が多いことが特徴である。木材が軽い=空隙率が高いので、それが製品としての断熱性及び調湿性(防湿効果)の高さに現れており、また=密度が低いために収縮・膨潤率が低いことは狂いが小さいことにつながっている。

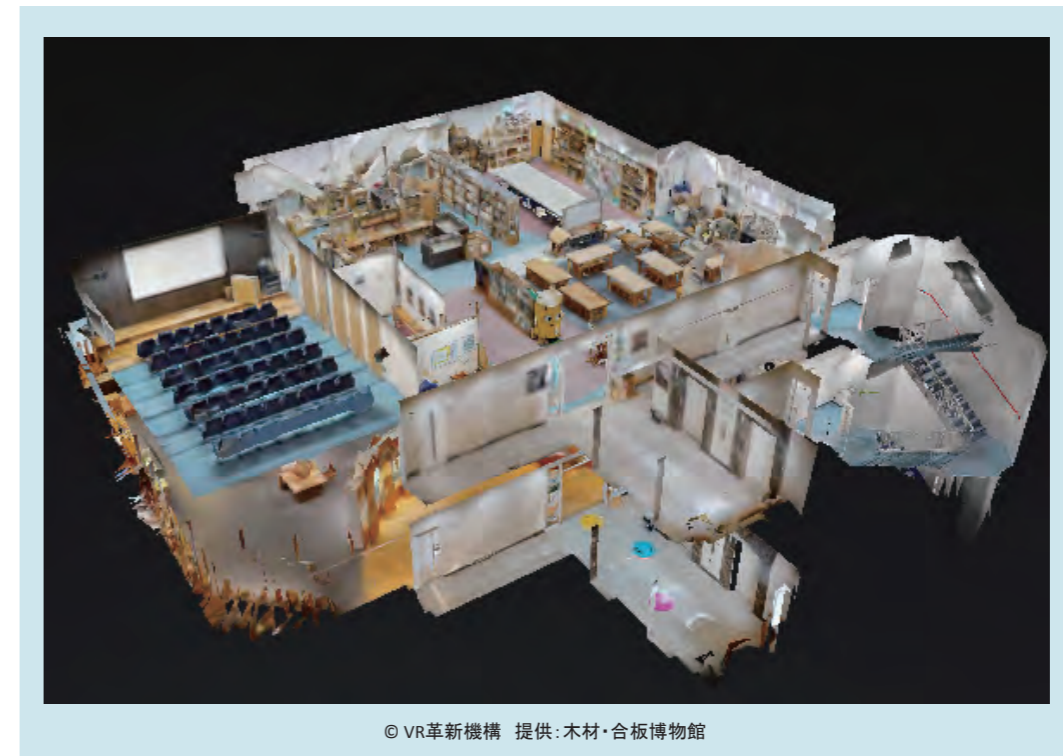
桐筆筒などに使う木材には、アク抜きや渋抜きといわれる雨水に曝したり天日乾燥したりの処理が1~数年近くかけて行われ、木材の細胞内に残存しているタンニンや油脂成分を完全に除去することによる虫除け効果の付与、タンニンに類似した成分などを完全に除去することによる黒染みなどの汚れ防止処理が施される。それらの副次効果は、渋みのある灰色がかかった穏やかな色彩と落ち着いた柔らかい質感の木材が得られることにもつながっている。

近年では、日本における高級家具向けのキリ材生産は限られ、軽軟材として箱等に使う輸入品が極めて多くなり、その大部分は中国から輸入されている。中国では輸入されているキリ属の木材は泡桐というが、梧桐といわれるアオギリおよび油桐といわれるアブラギリなどは全く別の樹種である。

木材・合板博物館 副館長 平川泰彦

イベント情報
Event information

オンライン館内見学始めました



©VR革新機構 提供:木材・合板博物館

音声ガイド

音声ガイドも併せてご覧
いただくと、より一層お楽しみ
いただけます。
(スマホ・タブレットのみ対応)



◆オンライン見学について

一般社団法人 VR 革新機構様ご協力の下、パソコンやスマートフォンでご覧いただける5G対応の3D+VRビューを公開しました。

当館は現在、臨時休館中ですが、入場制限を行いながら団体見学の受け入れを行っています。業界関係会社様、教育機関様などの企業・団体様1回10名以下のグループとし、1グループの見学または研修時間は1時間以内とさせていただきます。一般の方の見学再開の見込みは立っておりませんが、ぜひこの機会にオンライン見学をご活用ください。

※イベント・セミナー情報はホームページでご確認ください。 <https://www.woodmuseum.jp/wp/seminer/>

【お問い合わせ】 木材・合板博物館 TEL 03-3521-6600 / FAX 03-3521-6602 E-mail info@woodmuseum.jp